

「私の第一声⑳」

【初めての三者個人懇談会】

私は、平成6年、初任者の教員として貝塚に着任し、初めての担任をして4か月、何とか1学期の終わりを迎えました。しかし夏休みを前に、大きな取組みが待っていました。三者でする個人懇談会です。

「三者」とは、生徒・保護者・教職員（先生）のことです。

懇談会は、生徒はドキドキしますよね。学校生活について、先生と保護者が話をする中で、どんな話が飛び出すか予想もできません。触れてほしくない話題の1つや2つ、生徒みんなにあるものです。

私自身、小学校時代からずっと懇談会がいやでした。私には、落ち着きがない、忘れ物が多い、物をなくす、身の回りの整理ができない、学校からの配付物を保護者に渡していない、友達に嫌なことを言ってトラブルになる等々、学校生活には不適應に見える行動がたくさんありました。昭和の頃、これらの子どもの課題は、「家でのしつけ」で解決できると一般的には思われており、当時の先生方は、良かれと思って指摘をするわけです。子どもの私と保護者は1つ1つの指摘を恐縮して聞き、その後家で、同じ内容で私は保護者に怒られていました。

そんな私が、懇談会をする側になりました。実はする側も、特に経験年数の少ない教員は、ドキドキしています。少ない機会ですから、充実したものになりたいのですが、クラス全員について、保護者への報告や生徒へアドバイスをするためには、それだけの材料が必要です。評価（成績・通知表）については、小学校と違い自分は1つの教科だけなので、他の教科のことについては、各担当者から情報を集めます。教科以外にも、総合学習や特別活動、道徳、生徒会や委員会の活動、部活動など、様々な活動があります。もちろんクラスでの班活動や休み時間での友人との様子も重要です。学校での人間関係は、うまくいくのといかないのとでは、毎日が天国にも地獄にもなるのですから。

平成になると生徒の良いところを伸ばすことの大切さも重視されるようになっていました。自分の昔の経験もあったので、生徒と保護者に「懇談会にきてよかった」と感じてもらうため、生徒一人ひとりの輝いているところをちゃんと伝えよう！ 課題の指摘はそれからだ！

と考え、相棒の先生にも協力いただき、なんとか準備を終えました。

懇談会の初日、ある生徒がお母さんとやってきました。お母さんはとても学校に協力的で熱心に話を聞いてくれる方だと感じていたので、安心して懇談を始めました。その子は真面目でとてもやさしい子だったので、学校の様子を伝える場面で、そのことを褒めながら話しました。成績について話をする場面では、彼のもっと頑張ってもらいたいことを伝えるため、彼の課題や出来ていないことを指摘しました。どんどん指摘しました。ふと気づくと、彼の眼は、涙でいっぱいになっていました。私は「あっ！…」と思って話すのをやめました。

お母さんが話し始めました。「うちの子が勉強を得意でないことは、よくわかっています。ご迷惑かけて申し分けないです。でも、どうしたらいいのか、わからないんです。この子もがんばろうとはしているんだけど、うまくいきません。どうしたらうまくいくのか、それを教えてもらえますか？」お母さんは、涙をポロポロこぼしながら、言葉を荒げることもなく、思いを伝えてくれました。

私は、こん棒で頭を叩かれたような衝撃を受けました。やっぱり心のどこかで「だめなところを指摘するのが教員の仕事であり、後は、本人と保護者が何とかしてくれるだろう」そんな風に考えていた自分がいたのです。自分自身があんなにいやな思いをしたはずなのに。

令和という時代になり、学校の在り方も大きく変わろうとしています。教員は、学習の専門家として、一人ひとりの子どもの状況や性格、特性や得意不得意を含めた特徴を捉え、本人の意欲を高めつつ、その子に最適な学習方法を提案することを、求められています。

完璧に要望にお応えできるかはわかりませんが、貝塚三中では、何よりも「この先生は、私の思いを分かってくれる」「私の力を伸ばしてくれようとしている」「一緒に悩んで、一緒に取り組んでくれる」という信頼関係を生徒一人ひとりと築くことを出発点として、学校づくりを進めていこうと思っています。

【不定期コラムNo.33】へつづく

第三中学校ホームページ

では、子どもたちの様子やお知らせなど情報発信しています。ぜひご覧ください。これまでの不定期コラムも「校長室より」のコーナーでご覧いただけます。

<http://www.kaizuka.ed.jp/dai3-jh/>

貝塚第三中学校HP



貝塚第三中学校HP